

外邦秘密測量の記録 - 村上千代吉手帳について -

牛越（李）国昭

村上手帳との出会い

1995年の秋頃、知人から古びた手帳の存在を知らされ、その内容を解析してみないかと勧められた。手帳は全部で32冊あり、もっとも古いものは今から百年前の1905年のものであった。これらの手帳の筆者は、村上千代吉という、中国や朝鮮の地図を作るために薬売りなどに身を窶してスパイをしていた人である。手帳は、東京での戦災を奇跡的に免れ、千代吉の孫である佐藤礼治さんが、祖母（千代吉の妻・珍＝あや）の遺品の中から見つけたものだという。非常な興味をそそられ、手帳を預らせてもらうことにしたが、村上手帳と名付けた手帳の解読はなかなか進まない上に、中国や朝鮮の地図を作るために活動をしたというが、どのようなことをしていたの実際がさっぱり分からない、雲をつかむような状態が続いた。その間、2年間ほど中国に行っていたりして、解読の作業は遅れに遅れてきた。中国にいるとき人民日報、テレビの報道で、日本による中国侵略戦争の時代に、日本が作った中国の地図が発見されたというニュースが流されることが幾度かあった。中国の人たちは、日本軍によって精緻な中国地図が作られていたことに、強い驚きと、それ以上に激しい憤りを顕わにしていた。そうした場面に対峙すると、地図の戦争に果たした役割の重大さを痛切に感じるのであった。そこから、村上手帳の分析には、日本が作った中国、朝鮮の地図とはそもそも何なのか、を知ることが不可欠だということに気がつき、近代日本の地図製作について基本的な理解を進めようとしてきた。そして、漸く陸軍参謀本部、陸地測量部の手によって、1945年8月まで、アジア太平洋地域を網羅する広大な地域と膨大な量の軍用外国地図が作られていたこと、それらの地図は、隣邦図、外邦図と呼ばれていたこと、そのための地図測量を外邦測量といったことなど、ごく基礎的な事柄を知ることができた。

こうした作業に参考となったのは、『地図・測量百

年史』『陸地測量部沿革誌』や外邦図についての諸研究論文などであったが、もっとも知りたかった外邦測量については、ほんのアウトラインをうかがうことができたのであった。『外邦測量沿革史草稿初編』の存在を知ったとき、外邦測量の姿を具体的にイメージできるようになった。なによりも、『外邦測量沿革史草稿初編』には、村上千代吉の名が数カ所登場し、彼の活動に関わる事件の詳細が記録されていた。また、昨年11月の第4回外邦図研究会で、アジア歴史資料センターWEBサイトの存在を教えていただいたことから、外邦測量関連の第一次資料は、かなりの量となっている。

村上千代吉の経歴、村上手帳の概要

村上千代吉は、1879(明治12)年12月12日、宮城県伊具郡藤尾村に生まれた。地元の会津尋常小学校、角田尋常中学校を卒業したのち、「体が丈夫ではなかったので、父親の仕事(竹かご作り)などを手伝っていた。ある時から陸軍関係の人と親しくなり、台湾に渡ってその関係の仕事をしていた」(佐藤礼次氏の話)ということであった。

村上は、1905年5月、21歳で陸地測量部に採用され、1907年3月陸地測量手となり、1929年(昭和4)年3月、測量官の最高位である測量師となって退官したが、退職後も雇員、嘱託として1938年11月に59歳で亡くなるまで、一貫して外邦図＝軍用地図の測量・作製に携わった。

村上手帳の第一冊目(村上手帳No.1)は、1905年5月に始まる。その書き出しは、「明治三十八年五月十一日 陸地測量部長ヨリ辞令ヲ受ク陸軍雇員ヲ命ズノ月俸二十円ヲ給ス第三地形班員ヲ命ス韓国安州行トナル」とある。これにより村上は、陸地測量部に採用され、日露戦争の最中に朝鮮に渡ったこと、朝鮮北部の中国との国境付近で測量活動をおこなったことが明らかとなっていた。これらの活動は、日露戦争

時の臨時測図部が中国東北部、朝鮮で行った外邦測量の一環であった。2001年になって、佐藤礼治氏が、新たに村上の自筆履歴書2通、多数の辞令類、臨時台湾土地調査局記念集(写真集)、台湾時代の小説風の自伝、数葉の朝鮮・「満州」・中国(清国)地図などを発見された。それらの新資料によって、村上は1900年臨時台湾土地調査局の雇員として採用され、1902年9月には臨時台湾土地調査局技手となったこと、1904年11月5日に文官分限令によって台湾臨時土地調査局を免ぜられたことがはっきりした。1905年5月の陸地測量部採用以後、臨時測図部部員として活動するが、1913(大正2)年3月の臨時測図部解散後は、中国駐屯軍(「支那」駐屯軍)司令部の特別測量班員・選抜された16人の1人として、中国での潜入秘密測量、即ち盗測を行った。その間、1919年のシベリア出兵時には、第2臨時測図部員として、東部シベリア、バイカル湖付近の地図測量を行っている。

村上手帳は、1905(明治38)年に始まり1938(昭和13)年に終わる、じつに34年間にわたる日記である。途中、1908(明治41)年、1909年、1916(大正5)、1935(昭和11)年のものが欠けていたり、何年のものか未解明のものもあるが、明治末期から大正期、昭和初期と連続したものが残されている。そのうち、24冊が外邦測量活動時の記録である。

村上手帳は、二つの時期に分けることができる。

第一期(1905～1932) 外邦測量期

- No.1 1905年(M38)～1906年 朝鮮半島北部 盛京省(現遼寧省)遼陽以西。
- No.2 1906年(M40) 蒙古東部(モトス事件)。
- No.3 1910年(M43) 潮州、黄岡、汕頭などを含む広東省の北東部、福建省との省界附近。
- No.4・No.5 1911年(M44)直隸省(現河北省)の北京以北、龍門、赤城、宣化、張家口などで囲まれる地域。
- No.6 1912年(M45) 預金証書などの忘備録。
- No.7 1912年(T2) 東蒙古(内和岳、吳魯都、明安、布南)。
- No.8 1912年～1913年 福建省(福州内陸部、永安県、貢川、赤水、嶂川)。

No.9・No.10 1914(T3)年 福建省。

No.11 1914年～1915年 河北省との省界にある山東省の慶雲、樂陵一帯。

No.12 1918年(T7)～1919年 1918年当初計画は、中国東北(洮南方面)。後に第2臨時測図部に配属。バイカル湖付近。

No.13 No.12と一対。シベリアの村々のデータ。

No.14 1920年(T9) 21年 22年 山東省済南付近。

No.15 1923年(T12) 1924年 安徽省(蒙城など)。

No.16 1924年(T13) or 1925年 1927年のメモもあり。

No.17 1925年～1926年 安徽省(蕪湖、安慶、黄州)。

No.18 1926年(T14)～1927年 安徽省(蕪湖近辺)。

No.19 1926年(T15) 中国東北(洮南付近)。

No.20 1927年(S2) 中国東北(昂昂溪付近)。

No.21 1928年(S3)5月 29年1月～5月 中国東北(昂昂溪付近)。

No.22 1929年(S4)6月～12月 30年1月～5月 中国東北(昂昂溪付近)。

No.23 1930年(S5)～31年 中国東北(布哈園付近)。

No.24 1931年(S6) 中国東北(海倫、黒河付近) 9・18の記事がある。

この他、医薬品や病気の治療法、中国語の発音などをメモしたもの、野帳に中国東北・ロシア国境地域の略図が記載されたものなど3冊がある。

第二期は、1936年のものが欠けているが、1932年から1938年の数年間、東京での毎日を記した日記である。村上は、陸地測量部に勤務し、それまでの朝鮮、中国、シベリアの大地を常に危険の中で盗測して歩いていた波乱の年月とは違って、平穏な日々が坦々とつづられている。

村上千代吉の活動と村上手帳の意義

村上は、1905年5月以降、1938年に亡くなるまで34年間、一貫して陸地測量部に勤務していた。「外邦測量沿革史草稿初稿」では、潜入盗測のために特別選抜された16人は、すべて陸地測量部の職を辞し身分を囑託としたとある。これは、秘密測量＝潜入

盗測が発覚、摘発されれば、直ちに重大な外交問題、国際問題に発展する可能性が常にあったことから、事件が発生した場合、「民間人の行為であり、日本政府とは無関係」とするための弥縫手段であった。だが、村上の自筆履歴書、辞令類などからすると、直接の所属は、陸地測量部、臨時測図部、「支那」駐屯軍など目まぐるしく変わってはいるが、原籍は陸軍省・陸地測量部にあった。もしかしたら、常に白紙の「辞表」が用意されていたのかも知れない。履歴書にある「昭和4年の退官」以降も、単独測量の終期を以て、亡くなる1938年まで、陸地測量部で雇員、嘱託として仕事を続けていた。一年間の活動パターンは、半年あまり(1ヶ月のときも、足かけ3年の時もある)外邦測量を行い、それ以外の期間は、陸地測量部での仕事(地図作製=調製)に従事するというものであった。

村上千代吉の名は、「外邦測量沿革史」、外邦測量に関係する陸軍参謀本部文書をはじめ公文書に頻りに登場する。「外邦測量沿革史草稿初編」では、緒言の特別測量班16人の名簿、1907年臨時測図部班編制表、1907年村上組長遭難実況談、1908年福州三都奥事件の項にある。村上の活動には外邦測量の真の姿が凝集している。村上は、日露戦争時から9・18(「満州」)事変の年まで、臨時測図部、特別測量班で外邦測量を一貫して担い、特に単独秘密測量、すなわち潜入盗測の開始から終了時まで中心的に活動した。生涯を外邦測量・盗測にかけきったが、村上手帳の一冊一冊、朝鮮や中国、シベリアの大地で、日々の行動の仕上げとして記した1ページ1ページに、それは刻みこまれている。1923年の関東大震災発生するとき、この年の外邦測量計画では9月下旬に出発することになっていた。村上の妻あや(珍)は、晩年の手記で、「日毎にガタガタの地震も遠うのきまして、人々の心も徐々に平穩になりつつ」あったころ、倒壊を免れた住まいの改築問題が持ちあが

ったが、「村上が三日後には外国出張の日も迫って折りました…何が何でもお国のために万難を排して出張は実行しなければならない」と出発していった、というエピソードを語っている。

村上手帳は、各冊の記述からだけでは、いったい具体的にはどのようなことをやっていたのかを読み解くことは困難である。ほとんど、旅の備忘録程度のことしか書かれておらず、測量の実際が記されているのは希である。冒頭触れたように、村上手帳の解析の困難さもそこにある。外邦測量についての原資料・第1次の資料としては、「外邦測量沿革史草稿初稿」、「陸地測量部沿革誌」、「外邦測量の沿革に関する座談会」、公開されている国家公文書・外務省文書・陸軍文書(アジア歴史資料センターデジタル資料)がある。それらの資料、また「地図測量百年史」や「外邦兵要地図整備沿革誌」をはじめとした研究書・論文と対照させることから、村上の活動の具体的な内容、すなわち日本軍の軍用地図作成のための外邦測量、とりわけ秘密測量=潜入盗測の実像が浮かび上がってくる。また、外邦測量に関する様々な第一次的資料も、村上手帳と対照することでその内側の意味の多くが解かれてくる。

今日なお、村上手帳の解析はまだ半ばにも達していない。解読作業の大変さがあり、とくに出てくる地名は当時の小さな集落名であり、特定するのがなかなか困難である。また、外邦測量とは何だったのかを一定つかみ取るまでどうしても前に進めずにいた。最近ようやく臨時測図部の活動、潜入・単独・秘密=盗測時代の活動の中味がかなりはっきりしてきた。同時に、多くの新しい資料に出会うことが増え、大幅な訂正や補充に追いまわられているの実情である。ただ今年、日露戦争から百年であり、最初の村上手帳が書かれてから99年、来年は100年になる。この節目のときに、分析作業に一応の区切りをつけて、これまで分かってきたことをまとめていきたいと考えている。